水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

メダカが活き活き活き泳ぐ川

京都府 京都先端科学大学附属中学校二年 楠本 健琉

僕は生き物が好きだ。春にはメダカ、夏にはカブトムシやクワガタを捕まえて飼育している。ふと考えた。カブトムシやクワガタは京都市内でも見つかるのに、メダカがいない。なぜだろう？

僕がメダカを採るのは、京都府北部にある祖父の田んぼの用水路だ。京都市内との違いは何だろう。祖父に尋ねると、「メダカはきれいな水でしか生きられへん。ここには、皆が食べるお米を育てるための澄んだ水と豊かな自然があるからメダカもたくさん育つんやで。」と教えてくれた。僕はハッとした。メダカが暮らせるかどうかは、水の清らかさにかかっているんだ。「じゃあ、鴨川の水がもっときれいになればメダカも住めるん。」と尋ねると、祖父は「そやで。」と力強く答えた。

ネットで調べると、メダカは京都府のレッドリストに載り、絶滅危惧種に指定されているという衝撃的な事実を知った。本来、どこにでもいる普通の魚だったが、今では府内の生息地も限られ、京都市内ではほぼ絶滅状態にあると書かれていた。ショックだった。さらに調べると、かつて絶滅したと考えられていた深泥池で、奇跡的に発見され、今は保護活動が進められていることが分かった。一年前学校の探究活動で深泥池に行った時には見つけられなかったが、確かにいるんだ。

なぜメダカはこんなに減ってしまったのか。理由は三つ。一つ目は、生息地の消失。都市開発で田んぼや小川が減り、住める場所が失われた。二つ目は、水質汚染。農薬や生活排水で水が汚れ、メダカが生きるのに適さない環境になった。そして三つ目は、外来種の侵入。ブラックバスやブルーギルがメダカを捕食し、生息を脅かしていた。このままでは、メダカは本当にいなくなってしまう。

何かできることはないか。僕は祖父の庭にある大きな水鉢でメダカを育てることにした。用水路でメダカを捕り、水鉢に入れた。けれど、しばらくすると水が濁り、メダカの動きが鈍くなった。このままではダメだ。まず、水草で酸素を増やし、ろ過砂利を敷いて水の汚れを減らした。また、別の水鉢にためた雨水を利用してカルキを抜いた自然な水を入れるようにした。メダカは元気に泳ぎ回るようになり、卵を産んだ。共食いしないよう、卵を別の容器に移し、更に幼魚用の環境も整えた。それぞれに雨水が流れ込むような装置も作った。手間はかかったが、百匹を超えるメダカが育った。この経験から、僕は「水を美しく保ち、環境を整えることでメダカの命をつなぐことができる」と実感した。

その後、さらに身近な水環境にも目を向けた。夏休みの自由研究で近所の公園のビオトープを調べてみた。アメンボウやタガメ、水カマキリが生息する場所で二週間。数か所で水を採取し、顕微鏡で観察したところ、流れのある場所にはミジンコやアオミドロなどの微生物が豊富にいたが、流れのない淀んだ場所ではヘドロがたまり、生き物がほとんどいなかった。この違いから、水の循環が生態系にとって重要であることを学んだ。

僕はこの体験を通して、日常生活でも水を守るためにできることがあると気づいた。例えば、家や学校で水を無駄にしないこと、雨水を水やりに活用することなど、小さな工夫の積み重ねが水環境の改善につながる。京都でも水環境を整え、メダカや蛍、アユ、オオサンショウウオなどを守る活動が行われている。僕もその活動に参加したい。一人一人ができることは、小さな取り組みでも、人間の体の六十％、魚は七十五％が水でできている。すべての生き物の命を支える水を大切にする人が増えれば、メダカが住める場所も、僕たちが快適に暮らせる環境も広がっていくはずだ。僕の夢は、いつか京都市内の川で再びメダカが元気に泳ぐこと。そのために、水を守る活動を広げたい。